

笹川記念保健協力財団 地域啓発活動助成

2018年 1月 8日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団  
理事長 喜多悦子 殿

## 2017年度地域啓発活動助成

### 活動報告書

#### 記

活動課題 シンポジウム2017

～ がんになっても安心して暮らすために

緩和ケアを理解しましょう ～

---

活動団体名： NPO 法人 Spes Nova

活動者（助成申請者）名： 塩尻 瑠美

# 緩和ケアシンポジウム活動報告書

NPO 法人 Spes Nova

## I. 活動目的

本来緩和ケアとは、患者さんを含めた全ての医療職の連携こそが最も重要で大切にされるべきであると考えます。緩和ケアに関する正しい知識の普及を目的として、がん治療の初期から始まる緩和ケアを理解するためのシンポジウムを開催する。一般市民だけでなく、各分野の専門職を含めた医療者にも役立つようながん医療全体としての向上を志向するものとして機能することを目指すものである。

## II. 活動内容と実施の経過

市民公開講座 シンポジウム2017

～ がんになっても安心して暮らすために緩和ケアを理解しましょう ～

開催日 平成 29 年 12 月 9 日 (土)

開催時間 12:15～16:00

開催場所 横浜市開港記念会館 講堂

参加者 177 名 講師 8 名 スタッフ 34 名

主催：NPO 法人 Spes Nova ・ Spes Nova シンポジウム 2017 実行委員会

共催：横浜市医療局 ・ 横浜市中区

後援：神奈川県、公立大学法人横浜市立大学、医療法人平和会平和病院、  
一般財団法人神奈川県警友会けいけいゆう病院



## (1) 活動内容

講演前半：6人の講師による講演

「安心して暮らすための緩和ケア」

- |                                 |        |
|---------------------------------|--------|
| ・ 緩和ケアの全体像を示す基調講演               | 高宮 有介  |
| ・ 痛みのコントロール (オピオイドの知識)          | 余宮 きのみ |
| ・ 精神的苦痛に対するケア (精神腫瘍科の関わり)       | 小川 朝生  |
| ・ 死に対する心の問題 (哲学的アプローチ)          | 納富 信留  |
| ・ 地域連携による緩和ケア (横浜市鶴見における地域連携)   | 高橋 修   |
| ・ 在宅緩和ケアチームの実践 (コミュニティでの緩和ケア構想) | 山崎 章郎  |

講演後半：2人座長による緩和ケアシンポジウム (含 質問票への応答)

「よりよく (well being) 生きるために」

座長	国立がん研究センター がん対策情報センター センター長	若尾 文彦
座長	北里大学病院集学的がん診療センター センター長	佐々木 治一郎

シンポジスト	昭和大学病院 医学教育推進室	高宮 有介
	埼玉県立がんセンター 緩和ケア科長	余宮 きのみ
	国立がん研究センター東病院 精神腫瘍科長	小川 朝生
	東京大学大学院人文社会学系研究科 教授	納富 信留
	医療法人平和会 理事長 緩和ケア科	高橋 修
	ケアタウン小平クリニック 院長	山崎 章郎

## プログラム

開会挨拶	国立がん研究センター がん対策情報センター センター長	
	NPO 法人 Spes Nova 顧問	若尾 文彦
	横浜市医療局長	増住 敏彦

講師：基調講演 「緩和ケアの本質とは？～全人的ケア、死から生といのちを考える～」  
12:25-12:55 昭和大学病院 医学教育推進室 高宮 有介

講演 1 「がんの痛みで苦しまないために - がんの痛みとオピオイド鎮痛薬を理解する -」

12:55-13:15 埼玉県立がんセンター 緩和ケア科長 余宮 きのみ  
講演 2 「安心して確実に治療を進めるために（不安にどのように対応するか）」  
13:15-13:35 国立がん研究センター東病院 精神腫瘍科長 小川 朝生  
13:35-13:49 - 小休憩 -  
講演 3 「善く生きる」を考える哲学  
13:40-14:00 東京大学大学院人文社会学系研究科 教授 納富 信留  
講演 4 「いつでも・どこでも良好な緩和ケアが受けられる地域連携をめざして」  
14:00-14:20 医療法人平和会 理事長 緩和ケア科 高橋 修  
講演 5 「在宅緩和ケアの実際-ケアタウン小平チームの取り組み」  
14:20-14:40 ケアタウン小平クリニック 院長 山崎 章郎  
  
14:40- 14:55 - 休憩 -

シンポジウム

14:55-15:55 ~ よりよく (well being) 生きるために ~

座長： 若尾 文彦 国立がん研究センター がん対策情報センター センター長  
座長： 佐々木 治一郎 北里大学病院集学的がん診療センター センター長

閉会挨拶 NPO 法人理事長 塩尻 瑠美

司会：鈴木 有希子 (NPO法人Spes Nova 事務局長)

## (2) 実施の経過

「基調講演」 高宮先生

講演タイトル 「緩和ケアの本質とは？」

～全人的ケア死ら生と命からいのちを考える～



- ・ 導入部分のがん対策基本法について（がん医療の均てん化）
- ・ がん診療に携わる医師の教育（がんの診断時、診療時）
- ・ 緩和ケアを担当する医療者自身のストレスに対するケアの必要性  
これは患者のケアにも応用できる。（医療者自身が自分自身を知る）
- ・ 全人的痛みについて（身体的、精神的、社会的、スピリチュアル）
- ・ スピリチュアルとは魂の痛み（霊的、宗教的、哲学的、実存的）
- ・ トータルペインに対するケアは訴えに耳を傾けることから
- ・ 希望を支えること、確認することは重要
- ・ 患者のそれぞれの病への向き合い方の実例の紹介
- ・ マインドフルネス（瞑想）の有効性
- ・ 講演の最後はアメイジング・グレイスの曲が流れ参加者一同感動

「講演 1」 余宮先生

講演タイトル 「がんの痛みで苦しまないために

- がんの痛みとオピオイド鎮痛薬を理解する -」



- ・ 鎮痛薬は生活の道具であるから、使いこなすべし
- ・ 鎮痛剤の誤解を解く（痛みは我慢しない、依存症にならない、寿命は短くならない）
- ・ 痛みを放っておくことの危険性（より多くの鎮痛剤が必要になる）
- ・ 医師の処方によるオピオイドは安全
- ・ 痛みのある人はドーパミンが抑制されるために依存・体制は生じない
- ・ 鎮痛剤使用例患者の良い状態のスライド例提示
- ・ オピオイド鎮痛剤の種類紹介（長く効くもの、頓服的効果のあるもの、注射、座薬）
- ・ がんとうまく付き合う秘訣は相談上手になること

「講演 2」小川先生

講演タイトル 「安心して確実に治療を進めるために  
（不安にどのように対応するか）」



- ・ 不安はがんに対応する過程のひとつであり、診断時・治療中・治療後・再発・サバイバーとしての生存などの局面で強く意識される
- ・ 個人の世界観やトラウマ的体験などによって大きく左右される
- ・ 孤独感や生きることの意味、アイデンティティの喪失と将来への不安が強く意識されるようになる
- ・ 危機を乗り越えるための工夫 1. ストレスに対応する 2. 正しい情報を集める 3. 問題をリストアップする 4. 問題に優先順位をつける 5. 今までの関係を断たない 6. サポーターを作る
- ・ 不安には悪い面だけでなく、病に対応を促すきっかけとなる面もある
- ・ 周囲の方々がなすべきことは、善し悪しの判断をしないことと適切な専門家へ相談に行くことを勧めることです
- ・ 拠点病院における支援体制の紹介（相談支援センター、緩和ケアチーム、精神腫瘍医）
- ・ 国立東病院発行の小冊子「重要な面談にのぞまれる患者さんと家族へ」の紹介

### 「講演 3」 納富先生

講演タイトル 「善く生きる」を考える哲学



- ・ 哲学とは私たちがこの世界でどう生きるかを考えることです
- ・ 古代の三大哲学者（ソクラテス、プラトン、アリストテレス）の説明
- ・ 医療の現場で生じる切迫した問題には、そこから一旦離れた視点から考えることも必要
- ・ そのような余裕はないかもしれないが、そこで自分と状況に対して「余裕（スコレー）持って物事を見ることは必ず将来役立つのではないか
- ・ 古来より哲学は「生・死」について考えてきたが答えはない。無生物とは異なり、本来「命」は「死」を伴う営みである
- ・ 我々は「死」に対して何を恐れているのだろうか。ソクラテスは「不知の自覚」を求め

- る。「死」がよいものか悪いものか知らないのだから、死を恐れないと声明している
- ・ 人間の持つ「想像力」の力を用いて自分を少し動かしてみよう。想像は相手や自分を理解させてくれる。それが解決に直結しないとしても、歩み寄り双方の立場の理解につながるはず（相対性の乗り越え）
- ・ 講演の最後に、もしかしたら、私たちの「魂」は故郷である宇宙に戻り、「永遠」を志向するのかもしれないという宇宙観が述べられた。
- ・

「講演 4」高橋先生

講演タイトル 「いつでも・どこでも良好な緩和ケアが受けられる地域連携をめざして」



- ・ 「緩和ケア外来」は治療が終わってから始まるものというのは誤解であり、よりよい状態で病気と闘うためのサポートをしていくところ
- ・ 緩和ケアが提供される場所：緩和ケア専門施設、がん診療拠点病院、一般病院、在宅支援診療所、療養型病院、有料老人ホーム、今 患者さんがいる場所すべて
- ・ 療養の場の決定は誰がするのか？（患者・家族であって医師の決定ではない）
- ・ 心ある緩和ケア医のつぶやき：自分たちは「自宅に帰る」ことが一番いいと考えて、暴走・妄想しているのではないか
- ・ どこで最期を迎えるかは重要なのではない。大切なのは症状のコントロールが良好に行われ、安心して残された時間を過ごせ、家族とどのように大切な時間を共有できるかである
- ・ 何処にいても良質な緩和ケアが提供されるためには、地域全体としての総合的な緩和ケアレベルを高めることを目指してきた
- ・ 平和病院の緩和ケア科の紹介 緩和ケア病棟 16床 新規患者数 750名（H28年）



「講演 5」 山崎先生

講演タイトル 「在宅緩和ケアの実際-ケアタウン小平チームの取り組み」

\* 注：スライドは未発表原稿を含むため講演会のみにて使用 資料公開厳禁



- ・ 2002年 WHO の緩和ケアの定義 (QOL を改善するためのアプローチ)
- ・ H28 年度 「在宅緩和ケア充実診療所」誕生 判定基準紹介
- ・ 在宅緩和ケアの基準 (日本ホスピス緩和ケア協会)
  - 1) WHO の緩和ケアの定義に基づく
  - 2) チームメンバーは必要に応じて柔軟に構成される
  - 3) 在宅における 24 時間対応のケアを提供する
- ・ ケアタウン小平チームの取り組み
  - 包括的運営：在宅緩和ケア充実診療所、訪問看護ステーション  
居宅介助支援事業所、デイサービス、子育て支援  
配食サービス
  - 訪問実施範囲：訪問看護ステーション 3km  
クリニック 4km  
デイサービス 2km
  - 在宅看取り率 (直近 3 年間)：がん患者 82.9%  
非がん患者 89.7%
  
  - グリーンケア：茶話会、交流会
- ・ 地域在宅緩和ケアセンター構想
- ・ ケアタウン小平チームの目指すもの  
最期まで人権を守られ、尊厳と自立をもって人間らしく暮らせることを保証するコミュニティ

## 【 シンポジウム 】

タイトル ～ よりよく (well being) 生きるために ～

質問票への回答として応答する形式で行なった。

良い質問が提示され、参加者が大変満足されるようなシンポジウムとなった。



### 一般的な質問

- ・ 病気が分かったときから緩和ケアがスタートと良く言われます。実際、病院の緩和ケア病棟などは治療がなくなってから、主治医の紹介でどうすれば緩和ケアを早期からスタートすることができるのでしょうか。
- ・ 終末期に緩和の先生と受診科の主治医との決定的な治療の違いはあるのでしょうか。在宅での緩和と病院での緩和にも違いはあるのでしょうか。(患者・体験者)
- ・ レベル4の判定を受けたが、不安でどうしようもない。(家族)
- ・ 横浜市(川崎市含む)拠点病院に緩和ケアの為に麻酔医の医師は必ず在籍していますか。(患者・体験者)
- ・ 医師から緩和ケア病棟を動ける間に予約しなさいと助言ありましたが、現実はどうなっているのですか。
- ・ 3か月ごとのCT検査は必要なのでしょうか。ストレスが強いです。検査時の緊張、結果聞くまでのストレス、不安。
- ・ 死が目前に迫っている方でもデイケアセンターに通って来られます。食欲もなく、食べられ

ない状態で1日過ごされます。そこで働くナースとしてビクビクしています。心構えをご教示いただけたらと思います。(医療関係者)

## 各先生個人宛の代表的な質問

(高宮先生)

先生のお話には涙がとまりませんでした。先生にお会いできて、最後の時間を過ごせたことは患者自身にとって幸せな時間を過ごせたのではないのでしょうか。もっともっと緩和ケアというものを知っていただくにはどうしたら良いのでしょうか。私達にできることはなんなのかなというふうに広めて(知って)いけば良いのか教えていただきたいです。(患者・体験者)

not doing but being を実践するためにできること、心がまえ(病状がどのような状況になっても)についての考えをもう少しお聞きしたいです。家族としても・余裕がなく、率直なコミュニケーションがとれなかったり、患者中心に尊重して、考えてはいても難しいと感じています。(家族)

(余宮先生)

オピオイドは上限がないのなら、1回にどれだけ飲んでも大丈夫なのですか。

ご自身の緩和ケア者として大切にされていることをぜひ教えてください。

終末期の全身倦怠感なども薬で緩和することができますか。(医療関係者)

胸腺癌が発見され、現在レベル4-aです。今は痛みはなく、原発巣の違和感のみですが、今後の痛みの種類や、痛みの個所についてどのようなことが考えられますか。

痛みがガンによるものかどうか分からないうちは緩和薬(オピオイドなど)を飲むことはできないのですか。

(小川先生)

夫はステージⅣの肺がん患者です。今年は1月よりジオトリフを飲んでいますが。皮膚疾患の副作用がひどく毎日がつらそうです。薬と飲酒のことで相談します。焼酎などアルコールなしでは生きられない(唯一の楽しみと本人が言っています)状態で、せつかくの高価な薬の効用が心配です。(家族)

(納富先生)

近頃、宇宙の中の自分について少し考え始めています。善くいきたいと思いましたが。私は思いを言葉で伝えることが苦手で、強く多くの言葉で言われると、特に何もいえなくなります。もっと自分の言葉で伝えたいと強く感じました。

(高橋先生)

在宅から重症時に緩和ケアを希望（実施）している病院に搬送して頂くにはどうしたら宜しいでしょうか。

（山崎先生）

がんの痛みがオピオイドなど使用してもとれないとき、医師たちはどうしていますか。  
そういう患者さまはたくさんいますか。 （医療関係者）

在宅緩和ケアにたずさわりたいと思い始めています。どのようなことを学ぶことを先生の立場から求められますか。 （介護福祉士）

### Ⅲ. 活動の成果

定刻の講演会開始時間よりも早くから参加者がお集まりくださったので、受付開始予定時間を繰り上げて対応致した。みなさまの緩和ケアへのご関心の高さを感じることができた。同じように講師の先生方も、遠方からのお越しにも関わらず早めの会場到着でした。先生方の緩和ケアに対する熱き思いが伝わり思わず身が引き締まる思いだった。

長時間に及ぶ多岐に渡る講演内容ですからみなさまはお疲れになられたと思いますが、誰一人途中で退場なさることもなく、最期まで熱心に耳を傾けてくださった。終了後参加者をお見りする際には、口々にとてもよかったありがとうございますとお礼を言っていたのは嬉しい体験であった。

各講演だけでなく、シンポジウムに関しても多くの質問が寄せられ、それをお二人の座長が見事にまとめられことで参加者は大いに納得なさったようである。哲学の講演は主催者側の思いが先行して、聴衆には取り組み難いのではないかという心配は杞憂に過ぎなかったようである。質問も寄せられたので安堵した。

今回は当事者だけでなく医療者方もお聞きいただきたいとの思いがあった。予想以上の関係者をご参加くださり、今後の緩和ケアの発展に少しは寄与できたのではないかと嬉しく思った。

講演会の感想は参加者だけでなく、講師の先生方、行政からのご意見も頂きましたし、準備したスタッフの意見も取り入れましたので、今回のシンポジウムの評価の一側面を示すものとして提示します。

## 講師の感想



- ・ 素晴らしい講演会に参加させて頂き感謝いたします。素敵な会場と、心を込めたボランティアの皆様、熱心な聴衆。緩和ケアの原点と言いますか、心が洗われた気がしました。
- ・ 私が本当に伝えたかったのは、身体的苦痛すら和らがないなら、それは黙っていないで、きちんと伝えて欲しい、そして、その伝え方、緩和ケアの専門家の探し方でした。  
参加者の質問から私が感じたことは、以下のようなことです。癌は体の病気なのですから、まずは身体的苦痛の緩和が切実なのだ～ということを改めて感じました。
- ・ 緩和ケアとなりますと、どうしても終末期の話が中心になることが多い中で、その全体像を示す企画は、地域に向けたよい機会になったのではないかと思います。
- ・ 医療の先生方とお話しできたのも、とても大きな刺激になりました。また、ボランティアの皆さんも熱心で、会場からの真剣なご質問にも大いに考えさせられました。
- ・ 多面的に緩和ケアが語られましたので、聴衆の皆様にも分かりやすかったのではないのでしょうか。いい企画だったと思います。もし、私がお役に立てたとすれば幸いです。
- ・ 本当に素晴らしい講師の方々を素晴らしい構成され、各講師の先生方も、大変よいお話をしていただき、とても良かったと考えます。
- ・ 「国内の緩和医療・ケアに携わるおそらくベストの医師たちによる講演と討論で、疑いなく他に類をみない内容も最高の会であったと思います。緩和ケアに特化した医師だけによるシンポジウムというのは極めて珍しく、医学教育から在宅まで幅広い領域のスペシャリストの生の声を聴く機会は、大きな学会でもない貴重な経験でした。  
参加者の大部分はサバイバーとそのご家族であったと思いますが、本シンポジウムはがん診療に携わるすべての医療者にも聞いていただきたい内容でした。

## 行政の感想

- ・ とても素晴らしい講演で聴講者も最後まで熱心に聞かれていたことが印象的でした。あれだけの先生方に集まっていたことや、多くのスタッフの方々がスムーズに進行されていることに、スペース・ノヴァさんの力を感じました。私のほうもいろいろと参考になることが多く、とても勉強になりました。
- ・ 大変素晴らしい講演会を開催していただきありがとうございました。緩和ケアについては、今後もさらに市民の方がたにご理解いただきたい分野ですので、引き続きよろしくお願いたします。何か、行政に対するご要望がありましたら、いつでもご連絡下さい。
- ・ いろいろな知識が増え、参加できて本当に良かったと思っております。講座の内容は良かったです。今緩和ケアが必要な方も多く参加されていたことと思いますが、山崎先生のお話は、ぜひ学生や研修医の方に聞いていただきたいと思いました。  
哲学のお話も大変良かった、たとえ病気はなくても高齢になると死が身近に感じられ不安になるものです。  
啓発といいますが、時間がかかりますけど「教育」が重要な部分を占めるようになりますね。

## スタッフの感想

- ・ 作業分担をしていたので、皆さんが意識を揃えて出来たのは本当に素晴らしかったと思います。来られていたの方々が聞き入っていたのをみて、本当に良い公演が出来たというのが身に染みて伝わってきました。
- ・ 当院の患者様も参加されていましたが「すごく良かった。あつというもの時間でしたね。今度はいつやるの？」とおっしゃっていました。
- ・ 参加してくれた友人たちも、スタッフの親切な対応の感謝してくれて、又、それぞれの先生方の講義内容のすばらしさは勿論のこと、皆さんの緩和ケアに対する情熱を受け取り、特に、先生方、相互の連携が良くとれていることを感心していました。
- ・ 緩和ケアというものへの理解を私自身深めることができ感謝しております。その場にいらした方々の切実なお気持ちとそれに真摯にこたえられる先生方のおこたえにはこれから毎日を生きていくなかで、いろんな方と触れ合っていく中で見過ごしたり、忙しさを流したり、しないようにしたいと強く思いました。
- ・ このような素晴らしいシンポジウムの情報が、たくさんの方々へ届き、伝わったことがとても嬉しいです。今回参加できなかったの方々などへも Spes Novaのホームページを通じて、さらに伝えることをしていきたいです
- ・ 参加者の顔を拝見することもできたのですがみなさん真剣に傾聴され、涙されている方も多く本当に素晴らしい内容でした。私自身も緩和ケアにとどまらず「生」そして「死」について考える機会を与えていただくことができました。講師の先生に心より感謝申し上げます。

- ・ 会場にいらした方々だけでなく、きっと、その周りの方々の心にも届いて、いろいろな人の、より善く生きる力につながっていくのだと思い、感動しております。
- ・ 会場の皆さん真剣に聞いていらっしゃいました。きっとプラスの情報を得て帰宅されたと思います
- ・ 講演の内容では余宮先生のお話のわかりやすさ、山崎先生の実践の話が強く印象に残っています。
- ・ 終了後の会場の皆様のご様子が会場に来て良かったと言っていると聞き、スタッフの一員として参加できたのは良かったです。
- ・ 皆さまも、仰っているように先生方のお話には、わたし自身も心打たれました。すごく素敵な内容だったと思います。
- ・ 歴史的な価値のある会場で実施できたことは素晴らしい！ 参加者に若い方が多く見受けられたことはとても嬉しい！
- ・ 病院では、治療方法の説明はしていただけるのですが、「その先はどうなるのか？」という問いには、はっきり答えてもらえません。私にとっても、痛みへの対処方、緩和ケアの現状はすごく知りたいことでしたので、先生方のお話を聞いて良かったです。

#### 参加者の意見（アンケートより抜粋）

- ・ 緩和ケアについて理解することができた。緩和ケアの意義がよくわかった。緩和ケアを考える機会を与えていただき感謝申し上げます。
- ・ 色々な切り口での講演で興味深く聞くことができた。
- ・ どの先生も心に響く講演でした。
- ・ 今家族や友人ががんになっているが励まされ、大いに参考になった。
- ・ 恐いのが前面に出ていましたが、宇宙のお話とか緩和ケアが終わりでないという事で何か一歩踏み出せそうです。
- ・ がんや緩和ケア、麻薬について不安がなくなる（軽減される）内容で、一般の方にも分かりやすく良かった
- ・ 「がん」への恐怖心が少し緩らいだ。
- ・ とても解り易かった。がん患者の状態も良く理解できたし、具体的な個々の対応処理にも対処方法の目安となった。
- ・ 講演者の人柄が講演内容に反映されていて本当によかった。こうした医師との出会いが患者にとってどれだけ大切か！！本当に良いシンポジウムに参加できましたこと感謝します。
- ・ 緩和ケアの定義、実態や取り組みについての理解を深めることができたが、まだまだ発展途上であると感じた。普及に尽力される先生方には敬意を払う。
- ・ 緩和ケアに対して理解を深めることができた。医療スタッフとして目の前の患者さん、ご家族と接する中で、苦痛・不安と向き合う辛さをできる限り、緩和し、寄り添い支えていきたいと思った。
- ・ 色々な先生方が少しずつお話を聞きとても勉強になった。また事例をふくめてお話下さった

りもしたのでイメージしやすく分かりやすかった。

- ・ 緩和ケアについては漠然としたイメージしかなくほとんど何も知らなかったので、とてもためになった。がんの今後予想される痛みに対する不安がかなり解消された。
- ・ わかりやすく、がんに自分がなった時の後の道しるべを示してもらった気がする。
- ・ 痛みをとる薬（麻薬）ががんになった時は道具として使ってもら（考える）ということが発見でした。家で（自宅）で緩和ケアがしてもらえるのが理想、地域に働きかける必要を知らされた。
- ・ がんと向き合うということの大切さをあらためて認識した。この先今日の講演のことを踏まえ、生きていこうと思う。
- ・ 先生方の講演は大変有益でしたし、心動かされる部分があった。
- ・ 話を聴いて少し楽になった。
- ・ 基調講演で圧倒され、そのままあつという間に引き込まれた。
- ・ 緩和ケア＝ホスピスという概念がくつがえった。患者の家族という立場・心のもち方に参考になるお話があった。
- ・ すべての分野についてとても勉強になった。これからの生き方に役立ててきます。本当にありがとうございました。特に高宮先生のお話し、感動して泣泣となった。人の気持ちに寄り添えるよう日々勉強させていただきます。
- ・ 訪問看護に携わっており、緩和ケアについて基本的なところよりご講演頂き、理解を深めることができました。
- ・ 時間は長く感じたが、とても内容が深くかつ様々なお立場からの話を聴くことができとてもよかった。今日から「善く」いきていきたいと思う。
- ・ 講師陣がすばらしかった。
- ・ 自分の仕事に改めて向き合うことができ、責任のある働きをしているということを感じて本当に勉強になった。
- ・ 余命が判った人が緩和ケアの対象者だと思っていたが、そうでないことがわかった。今日で考えが改まった。丁寧な説明で良かった。
- ・ 講演者それぞれのお話しとても良く、またどこかで更に深い内容でお聞きしたく、しっかりお名前覚えて捜そうと思った。先生方、ご多忙でしょうか、お元気で活躍されますよう祈るばかりです。
- ・ オピオイド鎮痛薬について理解出来、使用の不安がなくなった。
- ・ 高橋先生の緩和ケアについての考えがとても良かった。
- ・ 自分が暮らすにあたって、又母（患者）に接するにあたって心構えができた。
- ・ 緩和ケアが広がっていることは良くわかったが、自分の住んでいる地域で緩和ケアがうけられるか不安がある。いざという時調べる手だてを知ることが出来たのは良かった。
- ・ 診療の時、先生、看護師にお話ししたいことがあっても患者さんが多く、時間を取らせてはいけないと遠慮してしまう。こういう機会に心配や不安についてお話を伺えるのはとてもありがたい。少しでも明るく楽しく最期まで自分らしく暮らす。（がんと闘いながら）大きな



課題だがまわりの人に助けてもらいうまく乗り越えていきたいと思った。

- ・ 看護師・医師向けの薬剤のシンポジウムを開催して欲しいです。今以上に患者さんの痛みや呼吸苦の緩和、広い選択ができればもっと緩和ができるのではないかな…。
- ・ もっともっと聴きたかった。
- ・ 来年のシンポジウムも期待しています。

## シンポジウムに関しての意見

- ・ 先生方の努力に感謝したい。
- ・ 会場からの質問に丁寧に答えていて、実際に不安をもつ人たちの救いになったのではと思う。身近な感じでよい雰囲気のシンポジウムだった。
- ・ 質問にこたえていただきありがとうございました。こういう場があるのも良かった。先生方同士での意見交換の議論も聴いてみたかった。
- ・ 講演の内容をさらに具体的に理解することができた。
- ・ また機会があれば聴講させていただきます。今まで得られなかった質問に関して、的確・明確な応答を頂きありがとうございました。
- ・ 幅広く、また今の流れ等もわかり、緩和ケアにとどまらず、人のあり様等も考えさせられた。
- ・ 充実した講演だった。
- ・ 家族が病気にならないと考えることがないので知ることができて良かった。
- ・ 質問にお応えになられてよかった。座長の司会もよかった。
- ・ 色々な話を聴くことができて良かった。
- ・ 事前に質問票配布にて、先生方に直接質問ができる流れが良かったと思う。よく講演会の最後に質問や感想を挙手などで募っていましたが、気が引いてしまったり、その場ではすぐに浮かばなかったりするもので、今日の方式は非常に良かったと思う。
- ・ シンポジウムでも各分野の方々からお話を聴けてとても良かった。緩和ケアが必要な患者、その家族と関わる中で、学んだことを活かしていけるよう頑張りたい。
- ・ 余宮先生の歯切れのよい的確な話しぶり、親しみやすさ良かった。山崎先生の在宅緩和ケアの説明も良かった。全体を通して色々なことが分かり、今後がんになっても安心出来ると思った。友人にも伝えたい。
- ・ 痛みを取る事、緩和ケアはとても大切だと思っているが、薬をうまく使える Dr に出会える事がとても難しい課題のように思う。
- ・ 最期を迎えるまで尊厳を持った治療の日々などの話、とても心に響いた。
- ・ 今日講演して下さった先生達にかかれる地域の人はお幸せだと思う。地域格差の問題を感じた。自身が北海道の過疎地で医療資源のない中で、父(すい臓がん)看取りは厳しかった。診てくれる医師がそもそもいなく、亡くなる過程の知識も全くなかったです。
- ・ 自分の心配事だけでなく、多くの方々のお話が聞けて大変参考になった。
- ・ 患者本人からの質問が多くて、実際の声聞いて良かったと思う。地域の中で一度でもつないであれば受けてくださることを聞き安心した。

- 座長のコントロールがすばらしかった。
- 質問のすべてにお答えいただくことが出来、うれしくありがたかった。頑張ります。
- 高齢化になる社会で色々考えさせられた。国にはもっと力を入れてほしいと思う。まだまだお聞きしたい事は沢山あるような内容でしたが、私達もきくだけでなく伝える大きな役目があること、再認識致しました。
- 小平クリニックが全国にあれば、心が落ち着くでしょう。
- 食べられなくなったとき→無理に食べさせず、平穏な最期をむかえていくことが大切では。ということがとてもよくわかった。
- 緩和ケアが必要な方に全て届きますように。良い先生が増えますように。もっともっと聴きたかった。



#### IV. 今後の課題

昔ながらのイメージが先行している緩和ケアを、正しい形で知り、QOLを維持するためには必要不可欠な手段であるとの認識を普及させるために、啓発活動としてのシンポジウムを実施した。

参加者の多くが新たな視点に目覚めたというアンケート結果が得られ、初期段階での目標はほぼ達成できたと思われる。しかし、さらにその先の課題が見えてきたのも事実である。まだ現在ではすべての緩和ケアサポートの体制が整っているとは言い難い。がん治療の均てん化が問題とされたように、現時点で早急に整えられべき課題は、充実した「緩和ケア」の提供とそれらを適切に利用できるような医療現場における施設間の連携を構築することであろう。

今回の緩和ケアに対する情報の提供は、まず患者さん方や医療者に緩和ケア医療の全体像を示したに過ぎず、今後はテーマを絞ってより詳しくどなたにとっても納得できるような教育的な関わりを含めたアプローチが出来ればと考えている。

#### V. 活動の成果等の公表予定

当団体として早急に取り組める緩和ケアの啓発活動は、Spes Novaのホームページ上でシンポジウムの講演を掲載し、どなたでも視聴出来るような環境を整えることである。単に講演会に参加なさった方々だけでなく、有益な情報を広めていくことが我々に課された役割であるとの思いを新たにしている。

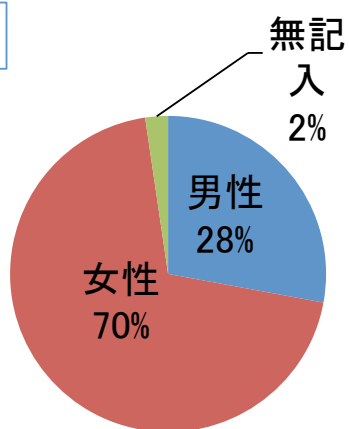


アンケート 集計

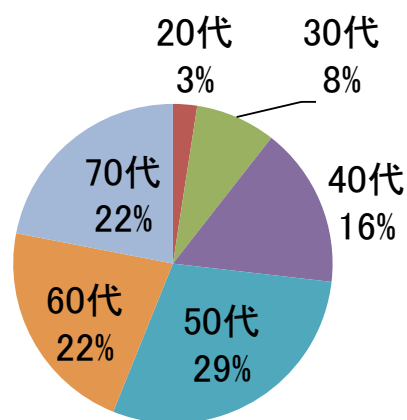
【全体状況】

参加申し込み者	211 人
当日参加者数	177 人
アンケート計	137 人
回収率 (i/d)	77 %

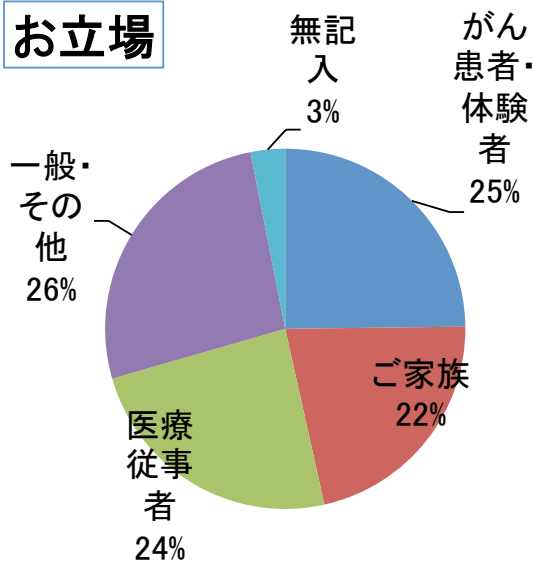
性別



年齢



お立場



お住まい

